

洋書輸入協会会報

VOL. 22
NO. 7

(通巻255号) 1988年 7 月

理事会報告

5月26日(休)

(一) 定時総会

会員に配付する定時総会報告案を検討し、原案通り決定した。

(二) 日米図書館会議

現況について事務局長から報告があり、未だ申込みのない会員に対して理事が分担して勧誘することとなった。

(三) 委員会の編成替え

各委員会の任務、現況等について各委員会ごとに検討した。本日の討論を基礎に総務委員会で討議することとなった。

(四) 入会申込み

㈱ウッドベル スコープ(代表者 鈴木幸夫 千代田区神田駿河台2-9-18 電話 292-5731)からの入会申込みについて審議した結果、入会を認めないこととなった。

(五) セミナーの開催

企画渉外委員会(ユサコ 山川隆司氏)から新田満夫氏(雄松堂)および椿孝雄氏(医学書院)を講師として著作権とコピー問題についてセミナーを開催することが報告された。

(六) その他。

6月14日(火)

(一) 四月分および五月分収支計算・予算対比表

総務委員会での検討にもとづく松井幸雄氏(丸善)の報告を承認した。

(二) 日米図書館会議

現況について事務局長から報告があった。

(三) JBIAセミナー

山川企画渉外委員長からセミナーを6月16日(休)に開催することが報告され、これをJBIAセミナーと称することが承認された。

(四) 特別会計

移転費用の残金の運用について討論した結果、元本保証を原則とすることとし、具体的に総務委員会で検討することとなった。

(五) 懇親旅行についての報告

文化厚生委員会(三洋出版貿易 武田全弘氏)から、6月10日(金)、11日(土)の懇親旅行への参加者は34社40名で、これまでの最少であったことが報告された。

(六) 委員会の編成替え

総務委員会で検討中であり、一年間位の期間が必要であるかもしれない旨報告された。中間報告がある予定である。尚、総会で承認された予算にもとづく委員会を今年度に編成替えすることに疑義が表明された。

(七) 関西支部

丹羽正之氏(緑書房)から関西支部の状況について報告があった。

(八) その他。

理事会報告…………… 1

文化厚生委員会だより

洋書輸入協会懇親旅行…………… 2

フォーティ・ラブ会報告…………… 3

洋書輸入協会史(32)…………… 4

「丸善・本の図書館」の概要(2) …… 6

おしらせ…………… 7

広 告…………… 8

洋書輸入協会懇親旅行 —白洲・上諏訪・美ヶ原—

東京駅前の地下道を潜って、待合せ場所である丸ビル前に首を出したら、先ず籤を引けと云う。当ってデラックスな1号車に乗る。2台のバスに格差があるので、運を試されることになったが、ガイド嬢は2号車の方が愛嬌がありそうである。

「集ったのだから、出ようじゃないか」、珍らしく定刻より早く、まだ梅雨の気配を感じない6月10日の晝前、協会の旅行が始った。順調に首都高速を八王子から西へ抜けると、東京の近郊かと疑うほど緑が濃い。山と谷の重なりを過ぎるごとに、金曜日だ、まだ仕事をしている時間だという意識が快適に一枚ずつ遠のいて、レジャーのくつろぎへ誘われる。大月を過ぎると談合坂の休憩。ゆっくり時間をとったパーキング・エリアなので、殆どどのメンバーが、此处で昼食をとる。二段重ねの弁当は、外装だけでなく中味も豪華であった。

信玄ブームの甲斐路を小淵沢で高速を離れ、白洲（はくしゅう）のサントリー工場を見学する。南アルプス甲斐駒の麓、静かに芳醇な美酒の眠る郷に入る。制限なく飲める饗応がある筈であるが、その前に一通り見学して、PRの洗礼を受けねばならない。人の働いている姿を見ない工場、設備投資をすれば、殆ど無人で動く蒸溜工場を羨望する。見学者一同の協会の顔には、我々の仕事は何と手数のかかることか、と悲しみに似たものが漂っていると見た。

ウイスキーの誕生が全く無色透明であることを知る。湧水の透徹が焼けるような75度のアルコールを持つという。北米産の樫の木樽に眠り、天使の取り分として4分の1ほど献上する年月を経て、琥珀の色が着く。

「サントリーで最高のブランド名をご存知ですか」背の高い案内の美女の質問。洋書輸入協会のメンバーは、それ程の高級品に接するチャンスが無いのか、横文字の輸入品の方に強いのか、回答が出ない。一緒に見学した他のグループの若者が手を上げて、「ザ・ウイスキー」「ハイ正解です」

この高級品を、その場で購入すると記念の台帳にサインできるとのことであったが、1瓶5万円也。美女までには手には入らないと判っているので、申し出る者は皆無

であった。もう一度、白洲を見学に行かれる方は、たっぷりお小遣いをご持参されて、ザ・ウイスキーを求め、サントリー嬢の満足の笑みを観賞されんことを。

コースは再び中央道に戻り、夕暮れにはまだたっぷり時間のある諏訪湖に着いた。100年以上の歴史がある布半（ぬのはん）なる旅館に入る。湯の量の多いのは熱海か別府かと思ったが、説明によると日本一は上諏訪とのことであった。湯舟から見る庭の樹木はよく手入れされていた。

宴会は東亜ブックの鶴さんの名司会で楽しく進行。昨年の水上では途中でダウンした鶴さんが、今年は緊張して備えたそうで、最後まで完投された。ご苦労様でした。宴会の席で、初めて参加をされた方々の美事なものを聞くのは楽しみ、友好即ち文化厚生。

翌11日、標高2000米の美ヶ原に向う。前日のデラックス・バス組は車輛を替ったが、2号車も並以上。僅かな水平距離の間に、400米の高度を詰めるので、かなりの急坂である。樹木の多彩な変化、緑の微妙な濃度が、自然の筆の巧みなタッチによって描き出される。カーブをひとつつ曲り終えたと眺望が新しく広がる。信州の山は美しい。美ヶ原から西北に、北アルプス3000米。の連峰が見える。雲が湧いて来たが、我々はその上にいた。山頂には美術館があり、野外の彫刻がある。フジ・サンケイの鹿内総帥がヘリコプターで飛来していた。グループの山頂美術企業に指示を与えるのであろう。石膏のコピーのヴィーナスは特別な建物に納めてあるが、大理石の肌の質感を移し得ず残念である。会場を一巡するが、お土産品売場を通らなければ出口に届かない。

霧ヶ峰に向う。車山の周辺ではハングライダーが飛び交っていた。一度空に舞うと、恐らく止められない快感を覚えるであろう。その構造が簡単なのを見てみると、江戸時代の若者も、信州霧ヶ峰まで来れば、上昇気流を掴まえたかも知れない、などと想像をする。

白樺湖を経て蓼科が昼食の場所、バスの所要時間が予定をオーバーしたので一行は空腹を我慢、アルミホイルで調理するいささか水っぽいジンギスカンにも活発にお代りを要求しながら、ビールの本数を重ねた。

関西の方々とは茅野でお別れ、帰路も順調に新宿に戻った。

年に一度の旅行、天候に恵まれ、楽しい二日間でした。若い人にも、もっと参加して頂きたい。古参の方はいつまでもお顔を見せて欲しい。各社1名参加されるだけ

で、120名の親善大部隊が編成される。来年も楽しい旅を続けたい。

企画、準備、お世話頂いた文化厚生委員の方々、特に委員長三洋出版貿易の、その衝に当られた武田さんに厚く御礼申し上げます。(洋販 栗原光輝 記)



フォーティ・ラブ会(テニス同好会)報告

6月4日(土)ー5日(日)、山中湖畔旭が丘より徒歩10分、レギュラーメンバーにとっては使い慣れた花月園テニスコートで初夏の例会合宿が行われました。参加費14,000円(宿泊代、食事代、コート代込み)。新婚カップルを含む延べ20余名の参加で、楽しく且つバッチリと行った練習とゲームで腕を上げたことは間違いありません。

前日の低気圧の故に、参加者が若干少なく、前夜出発の女性会員が御殿場近くで足止めをくうという難もありましたが、早朝のガスが上がる頃には元気な顔を見せてくれました。元気な初老を含む壮年朝練組は、低気圧通過直後のかなり濃いガスが頻繁に襲う滑り易いハードコートの上で、7時を過ぎたばかりの冷気を胸一杯に吸い込みつつ、懸命にボールを追って、何時ものとうり快い汗を流していました。

昼頃から、朝の霧も嘘のように晴れ上がり、富士山もくっきりとその雄姿をコートのかたわらに見せてくれました。フォーティ・ラブの合宿は本当に天気めぐまれ、発足以来8年になる今回まで、延期や中止の経験は一度もなく、全会員の常日頃の行いをシンボライズしているようです。

妖怪的人種が増加しているような不安を禁じえない今日この頃、楽しく健康な汗を共に流せる仲間の多いことは本当に嬉しい、幸せなことです。年齢、経験不問。皆さんの入会をお待ちしています。

それにしても、何時もクラブを支え、細かい気配りで、会をもちたててくれるマックミランの出口さん、マイブックスサービスの村上さん、三省堂の平野さん、他幹事の皆さんに報告を兼ねて、感謝の意を表します。

(R. A.記)



洋書輸入協会史 (32)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

36.3 フランス図書文化展の準備進展

昭和28年(1953)6月10日には、総数11,549点、fr. 13,182,809.-の仏書が発注されている。諸経費のフランス側と同業会側の負担の分配は、5月の打ち合わせで75万円対25万円であったが、6月11日のサントルとの打ち合わせの席上でベルナル氏から、どうにも不公平だとの抗議が出て、50万円対50万円に訂正すると的一幕も追加された。その折支払い、第1回 1953年12月、第2回 1954年2月ということで合意に達している。

フランス書展の副産物として、8月10日付の海輪第47号では、かねてよりサントル・デュ・リーブル・フランスに対し予納金の廃止を申し入れていたが、精算金を翌月5日までに支払うことを条件として、8月より試験的に中止をすることになった旨を会員に知らせている。これはフランス書展の準備を通じ、同業会メンバーと、サントル・フランス側との関係が深まったための一歩前進と受け取って差し支えないものである。

10月には下記の種々のことが最終的に決定し準備に万全を期した。

- (1) 日程：11月24日から30日まで
- (2) 場所：ブリジストン・ビル2F
- (3) 参加社及び担当者：丸善(桜井・平野・八木・田辺)、紀伊國屋(竹内、岡見)、国際書房(服部)、海外出版(高木)、旺文社、明治書房、福本書院、エンデルレ書店、アカデミア、欧明社の計10社。
- (4) 招待日：11月24日
- (5) 招待者：外務省情報文化局長、文部省、通産省、フランス大使館、新聞社など約50名。
- (6) ポスター：500枚
- (7) ラジオ：フランス大使館よりNHKに依頼
- (8) 新聞：朝日、毎日、読売の22日夕刊に広告
- (9) 正式名称：フランス図書文化展、EXPOSITION DE LIVRE ET PERIODIQUES FRANCAIS

36.4 フランス図書文化展の開催とその状況……フランス側資料より

これについては、展示会終了後、サントルのベルナル氏がフランスに送った報告書を参照して作製されたフ

ランス側のメモと、その和訳が残されている。それに展示会の様子、その後の状況などが記載されているので、その要約を次に記してみよう。

記

この試みは大成功を取めた模様であり、特に重要なのは、初めてのこの種の試みが東京で行われたことである。この展示会は、

本については、フランス書籍組合、図書展常任委員会雑誌については、フランス定期刊行物輸出組合の協力によって行われたものである。

この展示会の成功の大部分は、ベルナル氏に帰せらるべきものである。氏はこの会に豊かさや輝きを与えるべく、あらゆる努力を惜しまなかった。

会場はブリジストン・ビルの展示室に設定され、日本の10大書店、図書常任委員会、定期刊行物輸出組合の為に、それぞれスペースが決められた。

この会は、フランス大使館、日本外務省、日仏会館の後援の下に開催されている。そしてその記事は、The Nippon Times、朝日、毎日、読売及び芸術と文化誌に掲載された。500部のポスターが、大学、劇場、その他公共の場に貼られ、書店から顧客へは案内状が発送された。

会期中、称讃の辞が東京の各紙にのせられた。中でも定期刊行物輸出組合の円形スタンドは、300有余の雑誌を展示して、大好評だったとベルナル氏は伝えている。

入場者は約7,000人に達し、静岡、神戸、京都からの来訪者も数えられた。

この展示会に因んで、サントルは11月25日に、「フランス文化の一日」をブリジストン・ビルの会議室で開催した。席上大学教授達によってフランス文学、詩、美術、音楽、演劇について議論が交わされ、更に三つの短編映画が上映された。

この会と併行して、三越百貨店の書籍部でフランスの図書がケースに展示された。

展示会の効果について結論を出すのは時機尚早ではあるが、サントルに対する12月の発注は11月を上回り、1952、'51の同月をそれぞれ凌駕(りょうが)していることは注目に値する。

なお12月12日には、ベルナル氏と、出品した日本の10社、7人の教授・講師が会合し検討した結果、5項目のフランスに対する希望が表明されたが、それに対してはフランス側より今後考慮を払われるはずである。特にフランス雑誌のSpécimenの送附は、有用なばかりでなく必要不可欠のものであると思う。今日までに既に日本に適する350誌と連絡を取った。この数を更に増やすと共に、日本の一般大衆にフランス書の優秀性を認識して貰う必要があることはいうまでもない。(以上)

36.5 フランス図書文化展開催の意義

この展示会のためには、同業会理事会と密接にタイアップしたフランス書展実行委員会が、昭和28年の5月から翌29年の2月にわたって、実に20回も開催され、その準備と後始末に当たっている。そして戦後最初の同業会と、サントル・デュ・リーブル及びフランスの関係諸団体との共催による、大規模な展示会を成功裡に開催することが出来た。

このことは、その後に引き続いて企画されたドイツ書展を始め、幾多の図書展のひきがねとなったものであり、戦後日本の文化の再建に役立ったものである。同業会にとっても日本にとっても、またフランスにとっても意義のある催しであったということが出来よう。

37 税関の動き

昭和27年(1952)4月から書籍・雑誌の輸入が自動承認制となって、それまでの厳重な管理貿易が若干緩和された訳であるが、その代りにこの時点から同業会と税関との一面において密接な、一面において緊張した関係が生じていくこととなる。そうはいっても、自動承認制移行の当初は、まだ通産省と日銀の双方から厳重な規制を受けていて、対税関の問題は少なかったが、昭和28年に入って次第に輸入量が増加していくと共に、逐次その問題が顕在化してくることとなる。

37.1 図書リストの提出とその解除

昭和28年(1953)4月に入ると、東京税関外郵課より話があり、税関法第10条により、「耳と目より害があると思われるもの」をチェックするために、東京支所に図書調査室を作った旨の説明があった。そしてそのために今後輸入、輸出共図書目録を提出させることにしたので、協力を願いたいとの要請が行われている。これに対し同

業会としては、何度か税関側と協議を重ねた上、同年4月18日付の海輸第40号で次の通知を会員に対して出している。

記

東京税関へ図書リスト提出の件

かねて東京税関より輸入承認書の裏書の際、従来提出の仕切書とは別に、図書リスト(部数と書名のみ記載したリスト)提出方御申出がありまして、再三免除方協議して参りましたが、横浜税関と違って現品はすべて直接郵送されており、更に審議室が新設されました関係上、同所にて是非共必要の由につき、今後裏書の時は前記図書リストを一通添付御提出下さい。

尤も仕切書を代用しても差支えない由、その節は一通を図書リスト用として添附して下さい。(以上)

この件は、風俗関係のチェックは止むを得ないとしても、ただでさえ繁雑な輸入事務の上に、更に事務を重ねるものとして同業会メンバーには不評判であった。そこでこの後も税関側と何度か折衝を重ねた結果、翌昭和29年(1954)5月15日付、海輸第70号で次の通知が出され、図書リストの提出が解除されている。

記

東京税関へ提出の図書目録リスト廃止の件

従来東京税関において郵便物の通関に際し、輸入承認書と共にインボイス及び図書目録リスト(インボイスにて代用可)を提出する為、色々手数を要し困っておりましたが、今後は仕切書だけ添附することになりましたから左様御承知下さい。(以上)

37.2 最初の風俗関係の通達

昭和28年(1953)の12月19日付海輸第53号で、同業会は次のような通達を出している。これは、今までも時々問題にはなっていたが、正式に文書化されたものとしては最初のものである。

記

書籍の輸入について

管理貿易下、殊に外貨の事情も充分ならざる現状においては、不要不急品の輸入は当然自戒し差し控えるべきことでありますことは謂う(いう)を俟ち(まち)ませんが、

偶々(たまたま)最近関西方面において甚だしく風俗に影響のあるフランス・ヌード写真集が発売されている由にて、通産省担当官より特別な御注意がありました。

勿論当会員中には左様なものを輸入される方はないことを信じておりますが、上記の如き事情ある際、一段の御留意を頂きたく、御協力をお願い致します。(以上)

この件は、税関からでなく通産省からの注意になっているところが、自動承認制となったとはいえ未だ通産省の厳重な規制下にあったことを示している。また注意の理由が「不急不要品の輸入で外貨の無駄遣い」となっているところは、いかにも通産省からの注意らしくて面白い。(続く)

「丸善・本の図書館」の概容 (2)

丸善・本の図書館館長 鈴木陽二

3 沿革——(2) 開設から今日まで

こうして「本の図書館」がいよいよスタートしたのであるが、創設時は本社ビル3階、当時の洋書売場に位置して、広くゆったりした、明るい図書館であったように覚えている。初代館長は中村春太郎氏で、長年書籍を専門に担当してきた「本」のベテランで、本に対する理解・知識・愛情は実に深く、これから「本の図書館」の内容を固めていくという創成期にあって、誠に相応しい人物であった。そして、「本の図書館」の基礎を築き、軌道にのせる上で大きく貢献し、昭和37年に引退した。

2代目館長は八木佐吉氏であった。同氏は前述した山崎民雄の薫陶を受け、「本の図書館」の実現過程で蒐書の中心人物として係った、いわば当館設立推進スタッフの一人でもあった。洋書部門・和書部門と殆んど一貫して書籍畑を歩んできて、「生き字引」と称され、本に関するその該博な、また、高度に専門的な知識を基盤とし、ただひたむきに出版文化の啓蒙・発展に取組んだその活動によって「丸善・本の図書館」の名を斯界に高め、大きな実績を示した。昭和56年には「文化人間賞」が贈られたが、本を通しての人間社会に対する貢献が高く評価されたものである。こういう見事な事績を残し、在任18年で、昭和58年、惜しくも現役で永眠された。

一方、当館の組織や活動も、基本的には参考図書館としてのレファレンス・サービスが中心となって今日迄きているが、一時は目録部門を併合して組織拡大し、販促資料の製作を行ったこともあったが、昨年11月に本社ビル4階の現在の場所に大きなスペースを確保し、

装いも新たに、新しい展開の第一歩を踏みだして現在に到っている。

4 蔵書概容

蔵書はその図書館の活動の質を決める重要なものであることは今更言を要しないが、ここで当館の蔵書について触れてみたいと思う。もし、その内容を詳述するとすれば、いくら紙面があっても足りないことになるので、ここでは、その全体の概観と、その中で特に重要なものをひろって簡単に紹介するに止めたい。

冒頭で「本の図書館」の名の由来を述べたが、その名の通り当館は「本に関する本」を中心とした蔵書構成になっている。全体を色分けすると、当館の基本的性格である参考図書館としてのツールである目録類と参考図書類が全体の3分の2程度を占め、残りの部分の3分の2が出版や書誌学に関するモノグラフ、3分の1が丸善関係の資料、その他稀覯書が若干、ということになろうか。

目録類で圧巻は「大英図書館蔵書目録」(436巻)の完揃、「国際学術雑誌記事索引(IBZ)」185巻で、その他世界主要国のナショナル・ヒブリオグラフィーやブックス・イン・プリントを備えている。日本のものでは国立国会図書館の日本全国書誌や蔵書目録、都立中央図書館の蔵書目録等の他、全国の大学図書館や専門図書館の目録を、かなりキメ細かく集めてある。また、参考図書として主要国の百科事典、各国の辞書、人名録を備えてある。

出版や書誌学関係のモノグラフは広範にわたり、出版の歴史、出版研究、出版社や書店史、紙、印刷、製

本、蔵書票、情報学、図書館学、書誌学研究などの本に関する本の他、各大学の校史、東西交渉史も蒐書の対象としている。丸善関係では、社史資料、明治・大正期の出版物、学鑑のバックナンバー等を所蔵している。

第4のラインとしての稀覯書は、点数としては未だそれ程多くはないが、出版史上注目すべきものが含まれており、この蔵書群は当館の「本の博物館」的性格を形成しているといえるだろう。

- ・「百万塔陀羅尼」 現存する世界最古の印刷物として著名。孝謙太上天皇の発願によって宝亀元年(770年)に製作された
- ・「グーテンベルク42行聖書」(零葉) 最初の活版印刷機により1455年(?)に印刷された、余りにも有名な文化遺産の一葉
- ・ケルムスコット・プレス「チャーサー著作集」 ウィリアム・モリスによって製作された私家版の代表作

・「関コレクション」 戦後、連合軍総司令部の肝入りで製作された、天平・平安時代から現代迄の古和紙、手漉和紙の一大コレクションで大変貴重な文献
その他、「ニュールンベルク年代記」(1493年刊) 原葉、アシェンデン・プレス「アーサー王の死」(1913年刊)、ジョンソン・ディクショナリー初版(1755年刊) 桂川甫周の「和蘭学彙」(安政2-5年刊)等を所蔵。

丸善の明治期の出版物で特に貴重なものとしては、丸善最初の出版物で明治3年刊の「袖珍薬説」、「世界奇談」(明治8年)、尾崎行雄「公会演説法」(明治12年)、「新体詩抄」(明治15年)、沙比阿(シェイクスピア)「自由太刀餘波鋭鋒」(明治16年)、「百科全書」(明治16年)、ボーカース「想夫恋」(ボッカチオ「デカメロン」明治19年)、ヘボン「和英英和語林集成」(明治22年)等があげられる。それぞれ解説できればよいのだが、紙数の関係で羅列に止める。

(つづく)



開設当時の「本の図書館」



初代館長 中村春太郎氏



第二代館長 八木佐吉氏

お知らせ

下記のとおり、社名変更の連絡がありましたので、お知らせします。(1988年7月1日より)

新社名：日経BP販売株式会社

(Nikkei Business Publications Subscription
Sales Co.)

旧社名：日経マグロウヒル販売株式会社

下記の通り、事務所移転の通知がありました。

資料研究所

新住所：

〒101 東京都千代田区外神田3-6-5-904

TEL. 03-258-9207 (代表)

FAX. 03-258-9209

TLX番号は変更ありません。

J.B.LIPPINCOTT MEDICAL BOOKS

*Exceptionally useful textbook
and reference on pathology today!*

PATHOLOGY

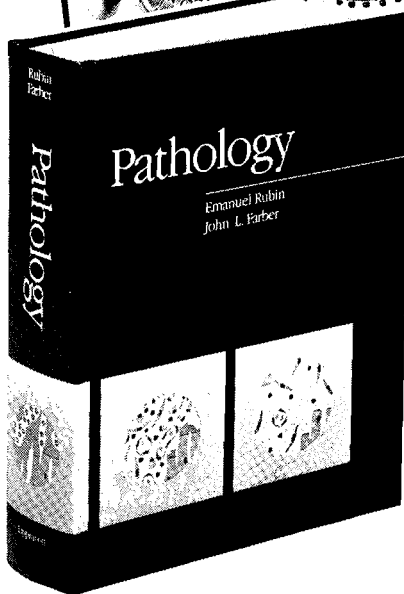
**Edited by
Emanuel Rubin, M.D.**

*Gonzalo E. Aponte Professor and Chairman
Dept. of Pathology, Jefferson Medical College
Thomas Jefferson University, Philadelphia, Pa.*

John L. Farber, M.D.

*Professor of Pathology
Jefferson Medical College
Thomas Jefferson University, Philadelphia, Pa.*

with 40 contributors



図説病理学テキスト

本書は、一般病理学と系統病理学の確かな知識を幅広く提供するとともに、その情報を今日の分子生物学と全面的に統合し、さらに臨床医学とも関連させて記述する新しい病理学テキストである。

複雑かつ詳細な病理学の情報をより深く理解し活用するために、各種病因、合併症、一連の病理変化をビジュアル化して簡潔な本文とともに解説している。

800点以上のモノクロ写真、および400点以上の二色・四色ダイアグラムを収録する。

肉眼および顕微鏡病理写真にはイラストが付されている。

フローチャートによる病理過程の説明、そしてキャプションにより簡潔な要約と段階的説明を行う。

●1600pp. 1285figs.
(incl. 442 in two-and four-color)
1988 ¥12,580



J. B. Lippincott Company
Philadelphia

J.B.LIPPINCOTT
Subsidiary of
Harper & Row Pub.Inc.
IGAKU-SHOIN

Exclusive Distributor in Japan

IGAKU-SHOIN LTD., FOREIGN BOOK DEPT.

HOMEI BLDG. 1-28-26 HONGO, BUNKYO, TOKYO 〒113 ☎(817)5670~1

1988年7月 通巻第255号 洋書輸入協会 編集者 柴田 三夫

☎ 103 東京都中央区日本橋1丁目21番4号 千代田会館5階20号室

☎271-6901 FAX.271-6920

☎ 530 関西支部 大阪市北区芝田1-10-2 第一山中ビル

☎371-5329